



源氏辨引物

十四



九
陽
宮
庫



若菜下

詩為卷の如海氏字一歳れ之月より字中七歳なりと
まてとま海氏らげ内字二より字あまるとは字年
わりのけ巻れ初より十段めまるとあて年月も
かかちつてとま海氏ら

上巻のまるとは小侍の字は
今更まるとはまるとは梅とよとむ梅とらけと
梅とらけ梅とらけとらけとらけとらけとらけと
梅とらけ梅とらけとらけとらけとらけとらけと

上巻のまるとは

夕秀と柳中と同車一して西遊とかなりしは
柳中の初はたれおす源氏の記すを
あしきく三月三月委の中はやうりてきてあう
こころひ驚くともけなよ三月盡よ人こまう
給り

殿上の賭弓

賭鴨鴨

賭弓は毎年正月十八日は事根源抄云天子弓場殿
よのどくそらとほ人ごう也仲春よりとくれ
しりい礼記のどめしゆるや棚とほさ的とまて
た右の邊はたのま東宮府合人丸の射ゆるはなる

大射射と奏せしは勝のうこ負れくは罰給と
ゆよ又勝のうに年樂と奏とく方遊乃管
願とあれりもくはなち射よは受言と
たぶをさうあうとく又殿上の賭弓とて
除河よりとほ人ごうりありとて殿上乃侍
臣の射ゆる

四府上の将佐中將尉将監志将曹又外衛三モ四

府アリ

三月三月三月三月

源氏の女院の忌月

晋穆帝后とあうり令して九月九日三月

〆くとあつと一と禮記よ忌日れ訂ありて忌月
 れ又あり一忌月わくく忌歳わくく一と云義あり
 又唐武后の時弊舟と平て軍と一と河凱旋入
 樂成るらんとして一それ高帝の忌月つと云
 義あり一と晋穆帝の例と行て終は軍樂と
 ありて一と一と本朝よ行忌月とけらるる日
 らわら九月九日の宴一延喜帝の忌月よわら
 日ありて十月よ是とわらるる道て強氣實と名
 付し事たり後相と云と事と一と文粹よみと云
 高倉院治菜五年二月崩御されは安徳天皇の代
 踏歌の節今より一と

かしらり 天子御王記 三年三月十六日殿

上侍臣於朱雀院歩射又天曆四年十月十五日
 試春宮擬弓力坊亮以下預試先試騎射次試步
 射

まくら一のふまざりしことにて けらるる前後に
 狗頭合ももさるること 細あひも細く

今りよららびり 三月盡と了

今のこのまはあひあはらるるものとたれたのほら

柳の葉とてとびあてはくさ

何史記曰越有養中

基者善射者也去柳葉百步而射之百發而百中
乏左右觀者數千人皆曰善射

うらの山終、 小右記長保元年九月十九日

日者内裡御猫産子女院九大臣有産養事有衝
重腕飯知宮之衣等々 猫乳安馬命婦時人嘆之
奇怪事也天卜以自若是可有徵歟 未聞禽獸用
人乳嗟乎

一三三の葉りま

唐武宗時宮妃後身為猫りる云

何々 君今まゝてかの娘れおのゝゆりてまらそ

氣のちごふ炊あるゆへ 小学二巻も夫婦別孔子

曰婦有七去不須父母去 無子去 絶無淫去

石去 乱家 有惡疾去 多言去 離親 竊盜去 及義

有三不去有前取無取婦不去 与更三年喪不去

男姑之ナキヒシ 前貪賤後富貴不去

日のみどゆくくぬみけくせほひて十八年よあせほひぬ

五十六代清和天皇治十八年と例とす

帝ハ海氏十八歳の内ハ延生十一歳とて受禪

今年海氏四十六歳とれハ讓位の次ハ年即位より

十八年、成(聖)受禪のち、元年を辛酉と号せしが、
 日比いとありくも、まをせ給ふりありて、傲(ま)たりぬを
 せむぬ。五十七代陽成院、依(テ)御(ミ)座(イ)脱(シ)履(ヒ)のりあり
 ありありとけんよ。考(シ)らば、教(キョウ)事(ジ)の表(ヒト)とせり
 て、冠(カウ)車(シャ)をもとせ給は、廟(ミヤ)のけ、臣(シ)佐(サ)とせぬ
 何(ナニ)ぞ、後(コト)漢(カン)書(シヨ)曰(ク)、逢(ホウ)萌(モウ)字(ジ)子(シ)康(カウ)北(キツ)海(カイ)人(ニシ)掛(カケ)冠(カウ)避(ヒ)世(セ)於(オ)遼(リョウ)東(トウ)
 東(トウ)觀(カン)漢(カン)記(キ)曰(ク)、王(オウ)莽(マウ)居(イ)攝(セツ)子(シ)宇(ウ)諫(ケン)莽(マウ)而(ニシテ)莽(マウ)誅(シ)之(シ)逢(ホウ)萌(モウ)
 謂(イフ)其(カノ)友(トモ)人(ニシテ)曰(ク)、三(サン)經(キョウ)絶(ケツ)矣(ニシテ)不(レ)去(ク)禍(ワ)將(シテ)及(ビ)管(クワン)人(ニシテ)即(シテ)解(ゲ)冠(カウ)
 掛(カケ)東(トウ)門(カウ)而(ニシテ)去(ク)之(シ)コノ語(コト)諫(ケン)ノ不(レ)用(ユ)ニシテ、隱(イン)居(キョ)ニシテ凡(ニシテ)
 二(ニ)意(イ)ハ家(カ)ニ不(レ)可(ク)上(シ)掛(カケ)冠(カウ)ノ字(ジ)ノ削(セツ)引(ヒク)也

冷泉院のつごおけり、まゝぬと
 帝王系譜云

弘仁中平代 孝威十四年四月十一日遷于冷然院十七日讓位

於皇太子天曆字平代 村上八年三月十一日政冷然院為冷

泉院細院細火災火災まげりしゆ、然然と白米、

申入て火災まづり、一代、せり内北帝とけ冷

泉院と也

つごおけて、東のせり、つえつ、まゝ、つご、つご、つご

冷泉院帝、源氏の子あり、そのまゝ、つご、つご、つご

ぬ、ゆ、こ、罷ひ、つれ、つれ、つれ、つれ、つれ、つれ

陽成天皇花 七代の母二條の后へ、平重平の中将とづき、つご

清和帝の御子なりけり業平の子歟と疑ありく
末の代は傳はるるよしと

源氏の打つてさるるの事一書と
業平和

源氏源氏の打つてさるるの事一書と
源氏源氏の打つてさるるの事一書と

源氏源氏の打つてさるるの事一書と
源氏源氏の打つてさるるの事一書と

源氏源氏の打つてさるるの事一書と
源氏源氏の打つてさるるの事一書と

源氏源氏の打つてさるるの事一書と
源氏源氏の打つてさるるの事一書と

源氏源氏の打つてさるるの事一書と
源氏源氏の打つてさるるの事一書と

源氏源氏の打つてさるるの事一書と
源氏源氏の打つてさるるの事一書と

五年九月九日御堂園白
隨身室家参石清水

并住吉給東遊神樂等
有之今案源氏君相具書

上参詣住吉可准之

源氏の世の事いふ人
更野大領祿益女

高藤公密通生女子
為兼香殿女御生延喜帝

買入聖人等の明を
入るる事一書と

源氏源氏の打つてさるるの事一書と
源氏源氏の打つてさるるの事一書と

源氏源氏の打つてさるるの事一書と
源氏源氏の打つてさるるの事一書と

源氏源氏の打つてさるるの事一書と
源氏源氏の打つてさるるの事一書と

春日奈近衛使の時舞人
陪従は皆近衛の官人等と

信時の奈に試し樂る酒をとり無の陣にとしてはとりなし

陪從は多くの業あつつきし 弄丁勤今の世めとし八幡

信時の奈に陪從の外は加陪從としては信家信家

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

とりなしてはとりなし 弄昔の陪從の外は加陪從

東遊の舞人の喜舞

和歌抄 東遊の舞人の喜舞

舞人の喜舞とてさう盛ん

賀茂臨時祭舞人竹文青摺袍

陶染下敷地摺袴合袴清從糴桐文青摺袍柳色

下敷白表袴合大口赤鈍半臂諸引等各別付之

のたれさう 修時祭揮頭使藤舞人櫻陪

後山吹但任者清中使あり舞人陪從のうさう

花のを右とてさうは流社行幸の時東遊は

使しあり

りめ子さうさうのうさうさうさうさうさうさうさう

東遊譜云先一二奇次駿河舞次末子次加太於

呂之調子高藤双調也長保五年任吉諸於御

社九府以下上達部其外殿上人合十人舞之神

主立舞相府脱衣被足今案乞八所舞とて

りて流社行幸るの物清代時八末子果て後公卿

以下十人さうさうさうさうさうさうさうさう

乞くさう後河部末子さうさうさうさうさう

白ひさしめりさうさうさうさうさうさうさう

さうさう

すさうさうさうさうさうさうさうさうさう

下龍家^{さきま}の文^{ぶん}之^の蒲^ふ自^じ條^{じょう}の神^{かみ}殿^{どの}上人^{じょうにん}乃^な下龍^{さきま}の神^{かみ}

如^{ごと}く藤^{ふじ}とたるやよかたしとて一^{ひと}りまいて合^あひ

河^か海^{かい}人^{ひと}長^{なが}のりともすり不可^{いか}なり今^{いま}長^{なが}の神^{かみ}祭^{まつり}の神^{かみ}

家^{いえ}まといちあ遊^{あそび}之^の如^{ごと}く祭^{まつり}の祭^{まつり}来^{きた}よと神^{かみ}殿^{どの}上人^{じょうにん}

もも神^{かみ}のり有^ある祭^{まつり}の陰^{かげ}從^{したが}りていふ事^{こと}なり

上^{かみ}の部^ぶなりとちりて一^{ひと}り

りり地^ちなるよき

たつと一^{ひと}

ありん門^{かど}より外^{ほか}の物^{もの}入^いりあましく一^{ひと}りおんび

白^{しろ}氏^し文集^{ぶんしゅう}曰^い君^{きみ}身^み唯^{ただ}同^{どう}堂^{どう}上^{じょう}言^{こと}若^{ごと}眼^{まなこ}不^な見^み門^{かど}前^{まへ}

たひりの銅^{どう}長^{なが}れひりの心^{こころ}とていひり言^{こと}れ朝^{あさ}とあや

一^{ひと}り

ひりちの神^{かみ}のりまはつしは長^{なが}れさるる神^{かみ}

昨^{きのう}系^{けい}福^{ふく}因^{いん}也^{なり}神^{かみ}の納^{のり}受^{うけ}して文^{ぶん}の言^{こと}もも神^{かみ}

一^{ひと}り

は平^{へい}の文^{ぶん}時^{とき}の聖^{せい}神^{かみ}廟^ぼの孫^{まご}也^{なり}神^{かみ}の言^{こと}もも神^{かみ}

根^ね也^{なり}とあり今^{いま}案^{あん}け文^{ぶん}時^{とき}神^{かみ}の言^{こと}もも神^{かみ}

ももつらつせりい言^{こと}もも神^{かみ}の言^{こと}もも神^{かみ}

いりては長^{なが}の心^{こころ}もも神^{かみ}の言^{こと}もも神^{かみ}

又^{また}文^{ぶん}時^{とき}神^{かみ}の言^{こと}もも神^{かみ}の言^{こと}もも神^{かみ}

ゆへに園吹ある須磨たゞ風の奇に壬午忠見り
集よゆらる新平中納言のあれうけ物落しおせ
しりそれと續け今よ海成まりとづきり別行
平の奇と入るれぬ忠人ナギ奇とせゆらるる
うのるもゆき文時郷と多しとのせらるる
ちとらるるいれぬかゝる人のよめも漢家
中納言のあれうけ物落し袋草子源氏物
落しう後よまゝお物なれぬとナギ奇とせゆらるる
とあやまりたりやゆらるるんがめも海成乃
後とゆらるるて実吹ある壬午の風の削と

ゆへに園吹

ゆ物落しおせ

ゆへに園吹

論語都々平文夫ヲ都々平文

ま下唐書ニモ誤タルコトアリ

ゆへに園吹

掲書とす之神の初文とれらる

ゆへに園吹

神樂れらるる物

ゆへに園吹

神樂譜

ゆへに園吹

ゆへに園吹

万

神樂のこゝろのこゝろ

十歳の子孫や

未
萬歳マンサイくク 万歳をマンサイよヨ 後ゴの代ノの万歳マンサイや

秋と一葉アキトイツバ。 八宮ヤツミヤの代ノ

秋の代アキノヨはハ夜ヨと一葉イツバをツケるルやヤ 朝アサのウツきキやヤ 時トキ乞ケ

皇秋ミマキの行ユキきキ 禮記レイキ曰イハレ 春見ハルミ云ク 朝秋見アサミ云ク 朝アサ秋見キ云ク 朝アサ見ミ云ク 朝アサ見ミ云ク

二葉イツバよりヨリ 後ゴひヒてテ 封フウくク 二葉イツバのノ 女メ三宮サンミヤ二親王ニシンノウ

と一葉イツバ之ノ 禄令ロクノリ一品親王ヒツピンシンノウ封フウ六百戸ロクマンロクジュウ位イ田テン八

十町ジュウチウ二品三品封フウ四百五十戸ヨウジュウゴジュウ位イ由ユ二品六十町ニピンロクジュウチウ

三品五十町内親王封フウ減ケン半位ハンイ田テン減ケン三分之一サンブンノイチ

今案イマアン二内親王封フウ二百二十五戸ニユウニジュウゴ位イ田テン四十町シユウチウ

一勅戸イツブコ民戸也ミンコトナリ千戸百戸と云トイハル民戸と云トイハル民戸と云トイハル

穴アナのノ心ココロをツケあハらハるル心ココロをツケあハらハるル心ココロをツケあハらハるル

樂書ガク曰イハレ 師文之シモノ愛アヒ易ヨク寒暑サムイ孫ソノ登ノボ之感カン動ユル風雷フウライ

謂イハレ琴事キンジ也ナリ琴書キンショ云ク 師曠シクワン晋之樂官也シノガクノツカサナリ上ウヘ於ニ琴能キンノウ易ヨク

寒暑サムイ占ウラナ風雨フウアメ為ナリ晋平公シノヘイキウ鼓ウタ之ノ感カン玄鶴ケンカク六下舞ロクゲノマユ

十二月ジュウニグヒ 持ツク事ジ子コ神カミのノ 又マタ十一月ジュウイチグヒとあトイハル 祓ハラひヒるル

此コノ十月ジュウグヒのノ 神カミ今イマ食ケのノ 公事キウジ根源ネゲン云ク 神カミ今イマ食ケハハ六

月ツキと十二月ジュウニグヒとのノ 十一日ジュウイチニチありアリ 天照大神アマテラスカミと勸請クワンソウ所トコロ

ありアリ 天子テンシ神カミ饗ケシと供ツクせセるル 今イマ四十四代シユウジユウダイ

元正天皇ゲンセイテンノウのノ 灵龜レイキ二年六月ニニニニよりヨリ 初ハジメまりマリ

公省ニ条ヨリ一町上ノ冷泉ヨリ北へ中和院八省に北之に在り

て神嘉殿中和院北の大床子に坐す此名を好む

又神祇館堀河ヨリ西二町之ニ条ヨリ三町目と方一町より行つておわり小

忌御燈と信じりの火と消てらりあわらむ

た右近の司殿の東西陣とひく開門圍句をと

あり取要ら

箏アヲ 樂器シテモテテガツル奏モテテガツル家恪所作

笙オヲのつえ 詩注十三鄭玄曰堂上鼓瑟鼓琴堂

下笙カハシマシキキスエヲ聲イシヨトク同音ハ八音ク充テ諸ニ笙トハ口ニラク物ニ比ス笙ハ

生也樂カサ意ナシ竹ノソノタリ東方ハ生ズル方ト云ハ樂カハ

鐘カネカラ仕始ル之ヲ傳ニ金奏スト云タ始ト云ハ八音トハ

金石キシ絲竹シシ匏土ホウツ草木ソウボク也大師注曰金ハ鐘也石ハ磬也

也土ハ埴也草ハ藪也糸ハ琴瑟之木ハ祝故之匏ハ

笙也竹ハ管也八音同音

其の言いふ事は何なる物なるをみて何とも

不審抄出云其言といふ事物と

春の陽の射する光不審あり可き物也或説云

樂カサもならずといふ事は隔句也

花は去年のあらわきのあらわれて

梅の枝をねむるをいふはこころはけり

そのあやむくまはよ一つなり

たがふはあはれなりたつてをきくもよみりける

はらのいよのすそを 至徳記云すそをいふは

とある

一よりていふはよしのをいふ

一の緒二越調也八の緒三黄鐘調也八の緒二越調

れこ也一越宮之黄鐘徵也注抄不用之

以縁の君を 源の孫之少房の子又舞臺の二宮も

むらうの服されは源氏の孫あり

二月の中此十日のあそびやこのころよりいふ

ドクム人らしてきよの御方もいふなり

えりふもいふ 白氏文集柳ヲ 白雪花繁空

拂地緑絲枝弱不勝簫之枝弱三宮ノ居カレ心

立月すのむらうもいふは源氏もいふなり

の言のりし 万葉集六二天乎八年を十二月四十立代

聖武天皇御製

橋花のまゝたてて葉之枝よ寂雖降益常葉折

まはれらるる月夜よ白

春宵一尅直千金花有清香月有隱

女のまことありて道にうかたれ人のあはれに侍る

毛詩曰女感陽氣春思男感陰氣秋思女

不ばりしめよあしうり人のあはれに侍

拾遺九雜下

太くおつよよあしうり人のあはれに侍

よりとこの次のあはれに侍るあり

陽と陰との律呂と此方と律陽とて春夏也

此の法にて秋をく日むは律とて其秋とすこの

子細のまはれ陽といはれ陰がたきけて陰陽和合

とらると易の地天泰卦のしく之の撰法撰法とて

天地否卦はしくして万物のあはれに侍る

春をよの呂と用秋をの律とては律を陽

法とす實校とす

子人のあはれに侍るありて道にうかたれ人のあはれに侍る

琴禁也禁止於邪氣也 以正入也 白虎通

昔れ人のあはれに侍るありて道にうかたれ人のあはれに侍る

樂書曰琴動天地感鬼神

はあしひさしうり人のあはれに侍る

始渡本朝之但元恭天皇 文武天皇 聖武天皇

始渡

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては
しほまのび うつちの物唐よりけ遣唐使の
時凡よとあつて波新國よりう琴とよまあひ
て浮かす

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては
うつちの物唐よりけ遣唐使の

景翠とよつとよまの殿のよれを碑てたの

いよまの今一はつとよつとよまの六月中の十日

初の日よまの殿のよれを碑てたの

この年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

あつきの年とちあつてすくくをさるるなりては

藤蕪香散楚江頭 湘竹叢邊淚不収

何きうまら 永願

鬼行の年とちあつてすくくをさるるなりては

慢心のたいまき

解事やと成るうづて物の教

流藝ま世れらひの中を我の自慢

世のまきれらむらぶれりのまきれらむらぶれり

莫把愁絲寫離怨カサキ 夜深簾外鬼神愁カサキ

一二ノ勺ハ在るノ勺ニキキ 舂之ニ勺此絲ハ琴ノ名之四勺

ハ感スル心ナリ 別離時ニハ十列ノ鬼神ノ聽ニトシ

子人のまをさるればいほり物と涙へさるるごとくせん

衆器之中琴キシノ 德家優モモイラシ 未遠賦琴カサキ

こゝろつらうらふ 譜カサキ 日本見自録カサキ 藤原世撰カサキ

樂家カサキ 三十三部二 百七卷

琴經一卷 蔡伯喈撰

琴法一卷 趙耶梨撰

琴用手法一卷

樂圖 畢

琴錄一卷

彈琴用手法一卷 雅琴錄一卷

彈琴手法一卷

あゝさゆびはらふ

催馬樂 呂 葛城

葛城の寺はふらふや豊等の寺れや西るらや

えのふ舟は白むきのらゆらむまづらやぞりんぞりんと

あつちの國をさへんや我家もぞ富せんやぞりんと

ぞりんとぞりんとぞりんと

二瓶えの舟は清水名之まつくハヒクク之浪ノ玉ヲ如ルラム

もろとんとぞりんとハ謹ノ節ノ今ニ瓶ヲ用テ祝言

ニラタヒ玉一リ

三人あみのまへ 河 琴カサキ 五ヶ調カサキ 搔手カサキ 川垂カサキ 水字カサキ 琴カサキ

蒼海波 鷹鳴調

花 うつら弟三三をよみ用とてまを母のわらうまうづく
のめをたてよよもあふく一いつたふれん

是秋より山の物よりあつたきし 弄 三人のうらうら

物語のふけりほひくまのうまそて 潤らぬらばあふ

今年に三千七廿をありけり 紫上のより之若葉巻

よ海氏子七つうらうらうわり今海氏の字をせられ

紫上の字を蔵りて一女をいらくくひるひを常の

ころし 宗御代

ころし御あり 三千七の女の重厄之落すも女海も机

七廿て崩れ

物よりくくろよあり守まのうらうらあつたきし

流んとれよかてやさし一ほざり今まて七廿

あつたきし 作六 万より十ふられけりた紫上事

宮より天降之海氏に十ふられれみされほごう

昔方わけて十の母をいよあつたきし 命の道

と也さいいふあつたきし 命継りのされざりし也

佛者ハ清世の為し人をすしめ堂塔とてては僧と

修業 ヒシボカ 貪走の人は施をせて人 ホレコシ 十ふあり

ぬやうよ 三ツキモキ 少の衆生現世安隠の祈禱 ト多 あり

りしより後生吾人の為とあり

忍のむらうつらうく 師云 礼法たどくそ 六三 和あり

一とん負節もて 下三 柔順と帰 六三 徳あり

此のさや 師云 此のさや 六三 徳あり

しと 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

いひて 六三 徳あり

乙然後訓為礼法使降其尊貴以順從其夫也帝
乙歸妹之時亦嘗占得此爻

中宮二の方と云ふ

我々の更科や伯母控山照月を
中宮月とて懸す人守れり
中宮二の方とて懸す人守れり

女御后もわつやありて 二系終れ業平と通

史記曰 後者徳のまを
後者徳のまを
後者徳のまを

忠臣不事二君貞女不更二夫と云
ん

えいひん
辭 遊仙窟 柏木ひく此悪逆

と別は門て業平を方人寸小坊後十柏木と
と知るか同ん心よらるる自他と云
れん之君子の悪を云へ湯を探しくしてを
ぬし

ゆりのきり
何麻高三人鬼氣不夜之 養性抄

人乃夢見ささうのふ神
下官乃將衣袖娘
子持候 遊仙窟
マツトハ我ト云ク我ノ字ヲモク

乃とつらつとやいふことな

なまぬれ方をとつらつとよむこといふはひまらそとつら

秋乃をららもんぼくし 今四月されし

乃のるらりらら月之乳をぬぐはるは秋まはる

おぼてゆくそももいふぬいれまはるは家のくは神あり

不審抄出云後撰子載大和物語等ゆもいれしあり

後撰云い 後川守福定もぬぬ物と辨言らるは家やたよ

日志云 せひおとくまぬける心志のあふまらぬいれ何あり

ゆーそそまける物と辨言あふまらぬいれ何あり

而淫けてかゆまらぬ中かゆはとぬぬにておぼは

さお首に皆如此ありとぬぬいれぬいれ也

弄 振月流は時物まらぬにてかゆまらぬいれぬいれ也

又云わらうと人と初もまらぬ心はなす

即ひいれぬれまらぬもらぬいれぬいれ也

辨此字也

あつらうし神は中もあつらうし即ぬぬいれぬいれ也

いまぬけぬぬいれぬいれ也 又婦の礼とまらぬいれ

かまぬとせせらうて人れまらぬいれぬいれ也 物まらぬいれ

初

限りある命はて 大般若経曰定業亦能轉

釋門書下目 此

不動尊此... 不動尊此... 不動尊此...

金剛平光明灌頂經曰世号不動立即軌後次觀

自在身成就尊形狀百申旬内所有難調鬼神

所持者皆悉能敬壞又正報盡者能延六月住不動

善無畏三藏之師欲滅弟子為受灌頂善無畏行

此法悉受灌頂其後猶延命之事有足

普賢ト金剛薩埵ト大目ト合テ不動ト名付多ク

す... 不動尊此... 不動尊此...

の... 不動尊此... 不動尊此...

編荷明神告貞崇法師給事見延長八年李部王記

延喜式... 延喜式... 延喜式...

紙塔... 紙塔... 紙塔...

長... 長... 長...

稱... 稱... 稱...

詞堂... 詞堂... 詞堂...

詞... 詞... 詞...

詞... 詞... 詞...

詞... 詞... 詞...

詞... 詞... 詞...

詞... 詞... 詞...

あめつらねの世より久しきこと

弄 ありき教をうそに偽せしむるは世より久しき事なり

教をいひて偽らざるは世より久しき事なり

か海原のららるる世より久しき事なり

不審抄出云、東の終女三交の密通して後世に鬼

は海原の方へ集り居りては此等しれ物の氣よらせ

法より一筆して糸れ改さるるは世より久しき事なり

後へまうられり時相おれぬ之宰執人のあらしむる

ふのりをとりの海原をぬきし人の時海原をよせり

宰力刀切宰と同。歎入ル。怪鳥入ル

心のらを腹ぎりてりて家 相手を刺さる見

女乃身みか同。宿をいりてい

涅槃經云、所有三千界男子、法煩惱、合集為一人

女人、為業障、女人地獄、使能斷佛種子、外面似善

産内心、如夜叉

五戒より 不殺生 不偷盜 不邪淫 不妄語

不飲酒

万葉豊前國娘女奇

夕園のるる世より久しき事なり

まの里より久しき事なり

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 夕の巻よいたるは紙の巻の巻よき言ひたまはれつ
 ようてこそはれみあたはぬあはくみつたれは夕の
 又須麻の巻よ月夜にゆきとてはつとて言ひ
 あやせむは後の川よきづりや海にみかぬとて言ひ
 とさひはれおののあはれ花の巻よきづりや海にみかぬとて言ひ
 あやせむは後の川よきづりや海にみかぬとて言ひ

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 夕の巻よいたるは紙の巻の巻よき言ひたまはれつ
 ようてこそはれみあたはぬあはくみつたれは夕の
 又須麻の巻よ月夜にゆきとてはつとて言ひ
 あやせむは後の川よきづりや海にみかぬとて言ひ
 とさひはれおののあはれ花の巻よきづりや海にみかぬとて言ひ
 あやせむは後の川よきづりや海にみかぬとて言ひ

信中將

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ

此の巻はよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ
 ひかやよき物語なり日御入すくく言ひたまはれつ

令謁見懷金十行以遺震曰故人震身知君々
 不知故人何也密曰莫夜無知者震曰天知神知
 我知子知何謂無知密愧而去注熊氏曰君子明
 不欺天不欺神内不欺心外不欺人

躬中すすゝもなればさるれれ

おま 友はも須多すも物とぞ我へは乃ほさる人

弟のさうくは故あさるさるれれ

おま 衆もさるさる人あさるれれさるさるさる

うはさるさるれれさるさるさるさるさる

おま 衆もさるさるさるさるさるさるさるさる

志さるさるあさるさるさるさるさるさる

何 迴向之文 願以此功德普及於一切我等與衆生
 皆共成佛道

みるみるびや河名 順和名脚氣一名脚病俗云阿

之乃女さるの物語すよ源中細言候賦段よまつり

ひそみるみるびやさるさるさるさるさるさる

さるの病れ悪名飲みさるさるさる世健れ物語よまつり

殿みるみる風あさるあり

おま さるさるの瘧病と脚病よのあまありみるさるさる

病のより血氣亂て病と行るゆへに
ととつ脚氣ぬるゆへに

癰病師云 疔瘡

癰莫略切

脚二重又多クノ意

かろしとけ車を行くゆへに

古文孝經曰七十老致仕懸其車置諸廟

永使子孫監而別季立身之終其要然也

コレは無事ニ身ヲ終タルト冠車ヲ先祖ノ廟ニ置テ先

祖告タルヲ又子孫ニ見セテ法シト也

わろしとつるゆへに

兼平立代

七年陽成院五十

七十賀無舞音

白據袍浦陶深下龍也

樂人三十人

朗詠下禁中

三十仙人誰得聽合元殿角管法聲

章孝標唐人

漢武帝仙道ヲ慕西王母仙業ヲ奉ル三十人ノ仙女

紫雲素含元殿ニ来テ樂ヲ奏ス以作者及第ノ

禁中列名詩人文客アツリ樂ヲスルヲ王母カ三十

ノ仙人ヲ引来タルニ也

仙遊霞

大食調トニアリ

其れ隣らう梅のうらみみるゆへに

其れ隣のうらみ

のうらみ見るゆへに

白りしとわきし梅の花と物とあしとちてまじし
まひるにこそぐれとれとこそとれ

かこしとつち務らるる海のとて解のたさるまて
世中のあまひはなほ海らうとまひるにすまぬあまじし

はらさぬよらぬ年よ老いのまじぬよらぬ

今りとうとせむつとさうとて 古今十六哀傷部
かろちあれゆさうしぢとまひう今限りの首途
月よとととらうつとらぬよ

あまのりの天宮よの心障障ある之天通い盈ととと心
ゆへ十ふらるるいもやけなれ始と二月れ十古比れあ
まらうととよ十二月又あるまてのびてれさうらあり

女三三交れあしとあまのり十ふらるるゆへけなれあ
例のあ寺乃の海經

軍代天武天皇四年始テ於諸寺誦經

天慶二年十二月自信之六十賀太政大臣於六

十寺修調誦永延二年三月十四日法皇院

大入道六十賀公家今日修調誦於六十寺

今兼口交れ時法寺の初論八年齡の教と月れ
定りてのあ寺乃の海經

のあはれましんあつひのほろびるはあめ

仁和寺に遷す 仁和寺に園堂本尊金剛界大日

をうつと云くみゆるは山浦経別り又仁和寺に園堂に
て摩訶毘盧舎那の山浦経ありと云

李郭王化云延長七年九月十七日在仁和寺諸皇

曰く云く法性子設中交々令皇孫本尊毗盧遮

那如来像

摩訶六梵語翻して大毗盧遮那如来佛ノ寶體

ノ譬ヲ取テ大日ト云大日經ノ題号ヲ大毗盧遮那神

變加持經ト云く不空三藏云く此云遍照亦云大日此

專日者照一邊也大日色身法身十方世界悉照曜又

報身ノ如来ノ盧舎那ト云ハ梵語ナリ此ニ光

明遍照ト云此照ニ二受アリ内ノ智光ヲ以テ真如法界

ノ理ヲ照ス又外ニ身ノ光ヲ放テ諸ノ大小ノ根機應同

スルヲ日光ニ類ス或又淨滿トモ翻ス諸佛ヲ盡シ淨

ト云衆德ヲ普ク徧ルヲ滿ト云盧遮那ト云 三身

元来一躰也

東大寺ヲ閻浮第一ノ盧舎那佛ト云閻浮ハ須弥山ノ

南方ニアル國之閻浮檀ト云金出ル所ナリ洲ノ名トス

け倍句れ法ハ古今ノ色ノ五麤不劫 雲林院のみ、常親王

仁朝、
孝子の奇ニ

吹海ノ野風ヨリヒト秋夜ニシテ
 後漢書列傳逸民傳韓康字伯休一字恬休京兆
 霸陵人家世著姓常采棗名山賣於長安市口不
 二價三十餘年時有女子從康買藥康身價不移
 女子怒曰公是韓伯休那那餘語也乃不二價乎
 下畧

〜〜
 韓伯休那と云ひ〜〜
 孝子の似り

柏木

以詞并言為卷名源氏四十八歳の正月より秋まで
 此のありし初まきよ冬十二月までこのあり
 命うひさ〜
 我ら身ハ又母此者之不義〜
 小學二孟子曰從耳自之欲以爲父母戮四不孝
 也丑不孝一也曾子曰身也者父母之遺體也行又
 母之遺體敢不敬乎居処不莊非孝也事君不忠

非孝也 莅官不敬 非孝也 朋友不信 非孝也 戰陳
陣無勇 非孝也 五者不遂 裁及其親 敢不敬乎

之ての世中をば

何 ちとれ物方のうたはるほどこの世のねつるれ

野山あもあへんをれ

何 ころか世といふらんを野山のあふをいふれ

たすのの年のねのあふ

奥六指 ころか世といふらんを野山のあふをいふれ

印のいよりえぬるき

ま なるれとていふるをいふるをいふるをいふる

柳のうたをいふ

な介 瀬川にたをいふるをいふるをいふるをいふる

のらんをいふるをいふる

何 けせとていふるをいふるをいふるをいふる

ころか世といふ

ころか世といふるをいふるをいふるをいふる

柳のうたをいふる

何 人の世をいふるをいふるをいふるをいふる

あるをいふるをいふる 七高のいふるをいふる

能く

だうにのぢりたるにいつけあまうゝそいふしとあへくそ

^{天慶六年三月七日薨}世継物語云時平次元之男小敦忠中内言天慶六年三月七日薨

^{号社祀}らら頼朝号社祀ら時薬師住号社祀とももせゆるり十二

津ねら軍毗羅大将号社祀とよとやめて我が頼朝号社祀

まこととぞとよめても中へ死ねひめ膝病れ人

といつてらり

なまゝひのまらうとて

何 志保何のまらうとて我のまらうとて

むじとてあまの

^{佐分利}志保のまらうとて我のまらうとて

まらうとてあまの

一念無量劫一念無量劫

心なまゝにありて

實徳實徳とて

木の根をささぐ

りてまゝにありて

今こそいふ

はあまのまらうとて

て清やまのまらうとて

ありまのまらうとて

ちよひて酒やまあすしゝたふさひぬらうとすうとふ日
八十代順徳院^{のちよひ}はてはま定家卿^{於群中}

道の丹野系^の柳りえ初て志意ひ乃煙うとぶよ
とよあつと後鳥羽院^評んおひて煙うとふ女行^せ
勃勢わり勃^{さま}評^は後依道^勃勢^思出^れたうし
家^のさ^れし^と煙^うと^ぶと^の初^林系^の評^しく
多れ^のを^りよ

^{群中} 蒼顔^觀鳥跡^作文字^{史記}

浦^のい^れぬ^は物^りな^れる^のを^りな^ん

^{英一}人の新^れる^るお^われ^の子^も志^する^を味^ひあ^つた
と^まれ^しら^んは^ら

^何妻^の家^のり^の家^や中^はれ^のを^りな^ん
今^もあ^らう^りん^とお^とし^ぬ

^何女^御顯^光公^の邪^氣と^て御^堂北^の女^乃女^御之^が

お^ひて^はぬ^るは^らか^らあ^らせ^ぬひ^てな^ま邪^気人
よ^はら^せて^今を^う積^りし^とて^も成^て笑^ふ
く^らや^うし^てら^らけ^ぬも^も

ら^うら^うし^てら^まよ^のゆ^らつ^てま^のは^らあ^りゆ^らさ
積^りへ^して^ゆら^つた^らが^には^らま

^何葉^花物^語之^粟

田^舎が^中は^因白^は成^るよ^のら^んは^らび^は野^の家^の
な^まら^う積^りけ^るを^毎日^の口^にあ^らわ^すて^まは^れ

新編巻十四
元

まう寝つらうきしり対面^{たいめん}何うてみぢりん地^ち
 あーうゆりてさやらゆりも寝あかしてうゆり年比
 たらあつらふなつてふふのうらやふゆりて
 ありくゆりてとよふらゆりゆりゆりゆりゆり
 もえりゆりてさう今あつらゆり成てゆりて松^{まつ}
 は付て大ふのゆりゆりのゆりゆりゆりゆりゆり
 ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 づらゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 おるゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 病中の休^{やすみ}良^{よし}師^しうらう言人^{ことば}は對^{たい}もれゆりゆり
 おゆりゆり
 ゆりゆりゆりゆり ^{徳^{とく}字^じ林^{りん}代^{だい}春^{しゅん}のゆりゆり}
 よあり成^{なり}徳^{とく}く

くらわらうきしりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 つゆゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
 今の不^ふ死^し死^し明日^{あした}不^ふ死^し何^{なに}故^{ゆゑ}造^{つく}作^{する}拙^{せつ}安^{あん}穩^{ゑん}無^む常^{じょう}身^み
 雪山^{ゆき}の鳥^{とり}
 啼^なき聲^{こゑ}
 やゆりゆりゆりゆり

雪の鳥

七二

我レの心ヲ人ノ心ト通スればモ心ノ通ルはシ也ナリ

ありの浦ノ入ルるノ心ヲ人ノ心ト通ス

法華經ニ曰ク世ノ常ニ不變ニ如シ水ノ沫ト泡ト焰ト

水の清キ濁ルてモ憂ハ世ト無ク常ニ流ルてモ流ルはシ也ナリ

我レてモ夫レ妻ト別レるノ子ノ孫ト生ルるノ心ヲ人ノ心ト通ス

と月ノ行クと花ノ開クと心ノ入ルてモ心ノ通ルはシ也ナリ

血ノ氣ノとシてモ子ノ孫ト生ルるノ心ヲ人ノ心ト通ス

の才ノとシてモ心ノ通ルはシ也ナリ

いハ古ノ人ノ精ヲ重キ於テ至高老子經ニ曰ク我ノ命ノ在ル

我レ不レ在ル於テ天ニ全ク係ル之ノ調適延命採要曰ク怨ハ

不可レ早ク古ノ法ニ男子十六而精通す乃レ必シ三十以上也ナリ

娶ハ女子十四以上而月水至ル乃レ必シ二十以上也ナリ

と今ノ世ノ女ノ十以上を人とシてモ嫁ム故ニ

男子腎源虚耗ノ疾トあり女子血道破損して

精ノ下レ流ス乃レ必シ世ノ精有限古法ニ若シ四日一度

度ニ行フ乃レ必シ八日一度四日一度十六日一度五日一度

十日一度乃レ必シ一日一度乃レ必シ一日一度乃レ必シ一日一度

精ハ女ノ人ノ心ノとシてモ我レ之ノ心ノ通ルはシ也ナリ

命ノとシてモ心ノ通ルはシ也ナリ

心ノ通ルはシ也ナリ

元武元天皇^{ルニナキ}御紀^ノハ^ニ信直^ノ也^ニ 實頼^ノのありけり^ニ 准^ノて^ハキ^ニ

し^テま^ラけ^レり^ニ 柏木^{カキキノ}に^テ馬^ノ守^ヲし^テ 教^ヲ給^ハれ^バお^のの^かむ^にけ^り

と^シて^ハい^はせ^りて^ハい^はせ^りの^あり^のま^じに^ハと^さり^奉れ^ルみ^はし^り

右大臣^{右大臣}兼^兼中^中 廉義^{廉義}公^公の^の 案^案を^をい^はり^奉 義

公^公の^の 執^執事^事を^を治^治し^りて^ハい^はせ^りと^ハい^はせ^り 世^世継^継と^とい^いは

れ^り 中^中の^の 方^方より^{より} 教^教給^給す^るの^の せ^せは^はり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り 清^清慎^慎と^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り 我^我の^の 命^命を^をと^とり^り

に^にお^おか^かし^しめ^めり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

男^男が^がい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

也^也 天^天文^文三^三年^年九^九月^月十^十日^日 元^元統^統

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

と^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^りと^とい^いは^はせ^せり^り

まづくみひてまげくよなつらと 何 自樂天自嘯詩曰

五十八翁方有後孫 静思堪善亦堪嘆

持益祝願無他語 慎勿頑愚似汝爺

樂天五十八子始ヲ男子ヲニテチタリ故ニ名ヲ生達

ト付タリ其子ニ向テ作レル詩之添成ハ四十八歳ニテ

薰ヲ生ス

おす... 玉篇徐册切ニ云韻

海... 樂天ハ我ニ似ズ...

物... 三ノミ...

三ノミ...

海...

日... 敢録一物と起河

後... 此科之礼法...

此科之礼法...

て之女...

た世... 何...

す... 夕芳の物...

夕芳の物...

此より動るは益しとあそりうらむに好ま
らと乱て被りもつらうと云くそ女をたれは
と一たしと也万をもたれは相もれはと
とこれれを家も変り

うはめも嬉しきせらうと云はり

嬉しきも愛もらうと云くそ女をたれは

世の理りともいふ物さうさうめりて

世の理りともいふ物さうさうめりて

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

とこれれは此の一倍と云はり

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

源三よれおまじはれと云はり

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

あそく不なると中庸の及はれと世俗の理り

大元より一人の形人ハ物志ノ毎ニなるらん

一村志一村志またのりけはひらぐて虫れきと人秋秋ハヤ

百草六五葉

思思く拙拙く一村志一村志虫れきとのまげきやと元ぬ御春有那クカ

多れ河とらてゑる寄早守備心

夕立れ一村志一村志ちちうて虫のまそらん枯風枯風とく

とりの神 細 基佐那云葉守神ハ物志物志あり

あひさういすのゆる 鷹鷹答 鷹鷹於於酌酌切切對對也

物志物志葉守神葉守神ハ物志物志ありとてさるれ物物

大和物語云枇杷枇杷友友長仲平長仲平より後子後子が家家に物

志志ありとらと物志物志はつらつら物志物志とて

ちりりたる

我志我志とらるる君君がうたのちりり物志物志ありとて

物志物志葉守神葉守神の神神らまけらとて物志物志ありとて

右右の駒駒志志と細細せとてまきと後撰後撰す六朝六朝の二枇杷枇杷友友長

月月守りて楢楢葉葉をのりめ物志物志ありとて

物志物志ありとて物志物志ありとて物志物志ありとて

我志我志とらるる君君がうたのちりり物志物志ありとて

楢楢葉葉の葉葉をのり物志物志ありとて物志物志ありとて

細流細流云云葉守神葉守神ハ物志物志ありとて物志物志ありとて

のりく 金葉集秋部金葉集秋部月月前前落葉落葉 後後頼頼朝朝臣臣

凡そや此等此節は、人々の心算の向ふは、
 此等唐書等の證を以て後代に於ての事なりと
 して、其の限るある世に於て、人の心算の向ふは、
 一、或る世に於て、人の心算の向ふは、
 後代に於て、人の心算の向ふは、
 かくて、不叶なるものあり、
 かりぬと通とと

右の軍が塚の草初てありと、
河天與善人吾不信右將軍墓草初秋
本朝秀夕云書

九大臣時平公の一男保忠ノ事ヲ作シテ詩ニ保忠ヲ右將軍
 ト云ハ大將ノ唐名ナリ故之又右衛門督ノ唐名ヲ金吾將

軍トイハ此所ニヨリ叶ク拍木ノ早世保忠ニ似タル
 云ハ二庭ノ草ノ気色ヲ見テ當座ニ夕霧ノ誦シ玉フ也
 今四月ナシハ秋ノ草ト誦シ替玉リ詩ノ心ハ天ハ善人
 加護スルト云辭シハ在昌ハ不信ノ故ハ右將軍保忠
 云賢也モ早世シ玉禎ニトシ

大御言正三位任陸奥出羽按察使兼行右邊大將
 藤原朝臣保忠ハ兼平
字平氏 朱在六年七月十四日薨四十

七号ハ條ノ大將ト
 大將唐名ハ羽林大將軍 幕下將軍トモ大樹將軍ト云

中將唐名羽林將軍ト云

衛門督唐名ヲ金吾大將軍ト云 衛門佐唐名金吾將

軍ト云

あつてまづれしもの

りてひけりる名をよぶ事

若菜ト三曲門督

日下ト三權中綱言 柏木卷ト三權大綱言

横笛 蘇風俗道曰武帝時丘仲所作七孔笛也

等為卷名 海氏軍九歲二月より秋とれりあり

軍ハ秋ト云

董二歳 女三歳

白宮三歳よりあり

故權大綱言

故トハ物故ト字乃上畧之死ト云

班固ト云

故舊ト云 虞韻

百の百

李邵王記曰天慶六年三月十九日

御八講 結願

大皇太后御極殿

矢入于時夕講也 余修

諷誦調布百端 南侍沙金百兩納瑠瑠壺一口 小

論也

ひくふ

文集ト云 尋泉上山遠者筆出林遲 愛シタレハ

何卒作

珍重後へたるあまの世はしるくよもせはひのき

幸来

花山院の御歌

初

世の中あつひなるれ竹の子うがはむ年をさしあ

そのころりれおのちの野光

河原を丁云

長れおんはくしれあうらう世の中はせりしれは

浮世わらわぬおれゆりて

おま八

世中はあつひなるれはくしる幸あうらうはくしる人

花れらうりあうらう

け

まゝはたれらうりあうらうはくしる人今もい合也さう

乞ひまゝ又明の中ま腹れねまはた感^{あつ}をありま

それと源氏れあ命をさしせぬとく柏^{あつ}もさし夕方け

すの下白と吟しれはくしるはくしるを我物あり

あつひ今もあ命をさしせぬとくあつひあつひあつひ

け 弄系

あつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひ

花山院集

あつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひ

あつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひ

河原の御歌

今更よあつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひ

あつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひ

あつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひあつひ

めりて月比の申すもさうさうとあはる
とふらひの申すもさうさうとあはる
めりてあはる

秋れカサの表なりよ

何 喜つて死れ一重の嘆けり物の表る秋を留され
ひの喜まげき野と

何 君さう一村爲此縁のまげおむり感さうさ
柏小巻少の一条のまを宿ゆふ一村爲たたり
げふひらうまれまをり人秋さひるへとあはる
合てさう

よの備えあはぬ

何 鍾子期死してはよ伯牙

何 今より後わが琴とさうさうのまげさうさ
絶一と今女二とと伯牙絶後また人柏牙と鍾子
期

何 月比の言はれもさうさうとあはる一月のまげさうさ

何 月比の言はれもさうさうとあはる

何 知るれるさうさうとあはる伯牙絶後とまげさうさ
何 此別ゆふと

何 のたつまはさうさうとあはる

何 渡舟にれと藤が原よ玉衣に世のなすまをひみり
 冥枝云忍若く是吟絶とてふふ解てあること
 物なればと母を命女を交れとを押くうてお
 ぬく

所うたあると打るもて

何 志の所うたあるせうせうつとてはのて
 物じつとておのけむりめりめとだよあそめは
 何 りうくは列へ自樂天た遷せし舟中よ商人の婦が
 比巴とよるふれとてさく樂天がたはは然ある身
 三三三三三三三三三三

今夜聞君琵琶語 如聽仙樂再暫明 比巴行

三三三三三三三三三三 和琴第二法と中の緒と秘曲

何 ぬれま婦れりよと女二交へ侍るてはは
 何 くの所うと居るもつととるれぬとて
 何 白くは羽打らうと飛鳥はねえとゆふ秋れよの月
 何 前よ月打つとてひて羽打らうとてまの羽つとて
 何 秋風よつとと歌ぬ居るまよとまの居るも
 何 雁不亂行之心

何 風よとてく物向りれらよ
 何 三三三三三三三三三三

さしやまへん

想夫恋

平調 無舞 日本 樂書 用ル字

韻府也ハ相府連れ下ヨ想夫戀とまりあり 弄ニ委

いふとくいなぬとらふははるるとい

らむらひれれのもはらういんであかきふまはるる

玉の端よせんかろり一掃いぬあうあうとらん

さよらんはらふあふはよはつとらんくものよにけり

くへへへけいぬりあうりてしとれまふとりのりては

てさよらんはらふあふはよはつとらんくも

向秀過山陽旧居思愁康閑清人吹笛作思向賦

向秀ハ愁康カ知音之愁康ヲ笛ヲキテ思出タリ

想曩昔遊謔之好文選 謔一説

つあ一の秋よりぬ出れ色ハ 出の色はあはれをよする

文選笛賦曰蜂蟻閑衆音猥積多

よるをれまはらういんであかきふまはるる

むあへくあへくまへくあへくあへくあへくあへく

とああああああああああああああああああ

とああああああああああああああああああ

ふすし柳まれりうねよき尾して着しつとせぬ
しよありきよ柳まれ別の懸傷れ信るはさぬと
るり管れまに我信るをさるり

國史云仁明天皇^仁和元^和正月^正辛未^{辛未}日^日身^身於
仁壽^{仁壽}殿^殿是夕^{是夕}初授^{初授}正六位上^{正六位上}大戸^{大戸}首^首清上^{清上}外^外從^從五
位^位下^下信上^{信上}能^能吹^吹換^換管^管設^設預^預恩^恩將^將々^々今^今案^案換^換管^管
二字^{二字}の^の出^出所^所也^也 所之也 大戸^{大戸}首^首ノ^ノ三^三字^字ヲ^ヲ如^如此^此ヨ^ヨ之^之尸^尸姓^姓録^録ニ^ニ
能^能ノ^ノ一^一字^字ヲ^ヲヨ^ヨリ

つと我つとこれ山の つつこの山は但馬國と八宅
つとあり 催馬樂 呂 妹と我 妹と我と

つとこれ山の心蘭。のあり觸るや。香とまらるる
よと毒まらるるや

つと月よるやとく夏とく人いありあり
けまに秋上

つとつとありとるをさるるにほりてあり人えをた
つとに秋上

つとみあがりありて 小児乳をとりしと
つと和名^{和名}嘔吐^{嘔吐}。小兒^{小兒}口^口嘔^嘔乳^乳冷^冷想^想不^不調^調所^所致^致也^也
つと嘔^嘔廣^廣韻^韻胡^胡典^典切^切。小兒^{小兒}歐^歐乳^乳也^也。又^又不^不顧^顧而^而吐^吐也^也。嘔^嘔見^見
つとまらるる地しりして 糶米 糶米也

つと神^神米^米也^也。教^教米^米して教^教法^法をまらるる
つと今^今の^の用^用目^目よ^よ一^一会^会の^の一^一り^りありて

細 經文曰臨終一念生處是定

とていふにすゝむやう 愛宕基寺 和泉本丸寺

されまへ 貫之集云世中つがましくおぼえて書

らむもあがりたれば公忠朝臣れ許よけすといふ人

もそとくうらうらるる母痛をこころうてしあ

ぬよきう

よき結するいおぼるる月影のあつるたの世やま

あー中へまゝいよせぬ行よせまれば

こころのあつるうらみあつるうらみあつるうらみ

あつるうらみあつるうらみあつるうらみ

あつるうらみあつるうらみあつるうらみ

あつるうらみ 康保四年七月村上天皇 五月十五日崩 六十二代帝

六七聖忌小野宮殿修調誦和琴横笛等為衆僧

布施管二位調誦草云有一龍笛蓋希代各物也

竜ノ音ヲウツテ笛ヲ作ソタリ龍吟ノ心ニテ竜

笛ト云リ亀啼ヲ聞テ鼓ハ作初之ハ豊地鼓ト云リ

昔よりあつるうらみあつるうらみあつるうらみ

あつるうらみあつるうらみあつるうらみ

笑ふれまよふもあはれなるにすゝてふまよひのあはれ
收らん

春日のあはれなりとて 弄 一法を董二歳舟之指貫

一重なる体に着せしめてらいたる頸後れなる物を

少神れぬるよとてすの之のうらとてふたのあはれなる

よとてなるあはれ

改式部卿文 亮 南宮式部卿貞保親王孫也

清和^{六代}神子母に二系石陽威院^神の四弟也

貞保と桃園式部卿 相憲帝弟之 薄雲卷葉 よびて之花を

紫の文式部卿とありされいけしむるあはれ

あはれなるあはれ

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

夢とて信じてあはれ小使女あはれあはれあはれあはれ

孫真人曰夜夢不須説とてあはれあはれあ

鈴虫 豎并

以青并詞為卷... 豎并

花つてえれありひさしのけり... 豎并

花机覆藻文紗月深也應和... 元年五月十八日御

記曰經櫃各置花足下机加花文... 豎并

家の内帳... 豎并

三尺はすねん悪鬼... 豎并

以華... 曼茶羅と翻譯... 佛壇と

切此翻壇新云正名曼茶羅言壇者鄭玄注禮云... 壇之言

浄名疏云香是離穢之名... 感通傳云

人中具氣上熏於空四十万里... 諸天清香無不厭

阿比陀佛けりしれがさる

釈經曰無量壽佛住之室中觀世音大勢至是二

大士侍立左右二大士ハ脇侍也

阿伽の具 名義集三曰阿伽此云水釋名云水

準也準平物也

かろとわろしうけて 至德記云蜜ハ蜂のちるあ

ゆる佛前ハ除て身喜して香具を調和ら

其のちろくろく取蔗ともす

以持經院をいよづのせあひる 天曆九年正月

四日村上天皇御為御后被供奉震業法華經有ハ

講

ふかかのみくまうつふ

竹青事見賢愚經

園白朝座夕座中間結願朝暮兩座説被行之

諸御人數或八人或四人

蓮葉を円いぐるりと繋りとて 五會法華讀曰

一々池中花盡滿 花々惣是性生人

各留半座葉花葉 侍我同淳同行人

わもら 棒物 さげもの 金もく荷葉を打

校りして珠敷を付るもさあり

七々のわづ 講師 讀師 咒願 三礼

唄 散花 堂達 是七僧使者也

日行も山の帝もゆくゆくして皆いつかあり

は瀬路れ使之日暮よりも夜よりもたてらるこ

夕のちみともさるけゆるもてふせはらわひありて

朗誦下僧ノ題ニテ張讀カ罔居賦ニ皇皇煙嵐之

断處 心清 晚寺ニ僧歸 け句よ付て文は

そり御布施捧物よりらゆりてとのぶ寺より

あるにすてつとけり

何とてなせつとどくゆ家よりとれ

ありとてな命するの御つらたときげくあふ

みさくみすれ 佛莊 庄莊ハ畧子ノ 佛技

月さくせつと花やうらり あみすあねれ月乃

まじりぬくくちゆとれありけ合てとく

削よりと氣おすりまにかふあ〜ゆよ

古今序云ク 逸者其聲樂怨者其吟悲

月さくさひのつとくも物さる〜ぬお〜るにゆよ

つとくも月さあねれあふとく〜とあゆ〜

れ〜と世の外ま〜と

三五夜中新月色 二千里外故人心 白樂天

なすはつひてい〜とあふ

何事ありあつたか
おのゝつらきものぞ
おのゝつらきものぞ

何れ月をたふし
何れ月をたふし

月影のつらきものぞ
月影のつらきものぞ

試よ外の月も
試よ外の月も

うらみはつらきものぞ
うらみはつらきものぞ

おのゝつらきものぞ
おのゝつらきものぞ

あり

何ナラレホラコノ
直衣布袴より西宮妙云上臈者直衣下着下敷隨
復不常事

うらみはつらきものぞ

おのゝつらきものぞ

おのゝつらきものぞ

おのゝつらきものぞ

おのゝつらきものぞ

おのゝつらきものぞ

おのゝつらきものぞ

涅槃経曰亦如朝露勢不久停之命れ

後漢書列傳曰人生一世若朝露之託於桐葉耳

おのゝつらきものぞ

ク食フ

目連始て六通を得ると佛よをた

いそり又仏は親也とふらんあつるもやも母は鐵鬼を

は落しんと救度せしむるも孟蘭盆経に説り

目連救母生天経に在大焦熱地獄中ト云いけ経

佛作ノ経ト云り故孟蘭盆経ヲ用ル

目連が通力も母を救しむるも佛の一カ

ももたしと三千界に聖賢をさすひ十方衆僧

と信事せしむるも母を救しむるも是より

之一切靈魂を吊の中は我が心寸靈魂

この心只一人の爲とする廻向の感應なり

此世に祈禱も國家長久万民快樂と祈らるる我

が心もこの心と一人の爲と祈り驗あり



